孫念見聞志

へ遠.3
2475
1—95

茶磯榮

へ13
2475
1-95

大江清記

謙信見聞志

序

自古武を司るの大將技業の四性各勲功を立世を渡る多なれども唯一軍の際士卒を率て海内指揮する事独大江清記の謙信公の御覽頼朝公の武徳

大正六年一月十五日寄
本校出版部氏贈

足利氏の大欲を改むべし。
もしも又兄の継云々と謂ひ出る程の威
名を輝し給ふ武将のうつみ也。
四海の武士を部人と称し天下の政
道武家の計とす。日本想迫補使
を得る事、海内武つの棟梁大
の命ぞる元帥なるぞや。右幕府の
及び朝廷頼朝右府淳三代の事

を記せる事、ひとまづ筑中東
漫ちとりて実録りとす。
見る所源鎌倉政道の表と記せる
事なれば安堵なり。
三代の忠信大臣の変大江朝臣廣
元簡亜簡実の君子なり。私の筆
記ありし事も海東の事なりと
迎源平の友龍四人生れる者見

を得大てんを学び世の東海道
くらべ国所々の絵ひき書とつづり号
す藤金見宣志ら拾ひ暇
す古を見物するとぐ多れば
一紙人付書を市ゲ業屋みとちき
ありて序文を求ら事三輝をし
世界見覚多あるく多拾世事を
見物と池をる面白

安永三年　二位と誤りなり

甲午　季秋

上洞

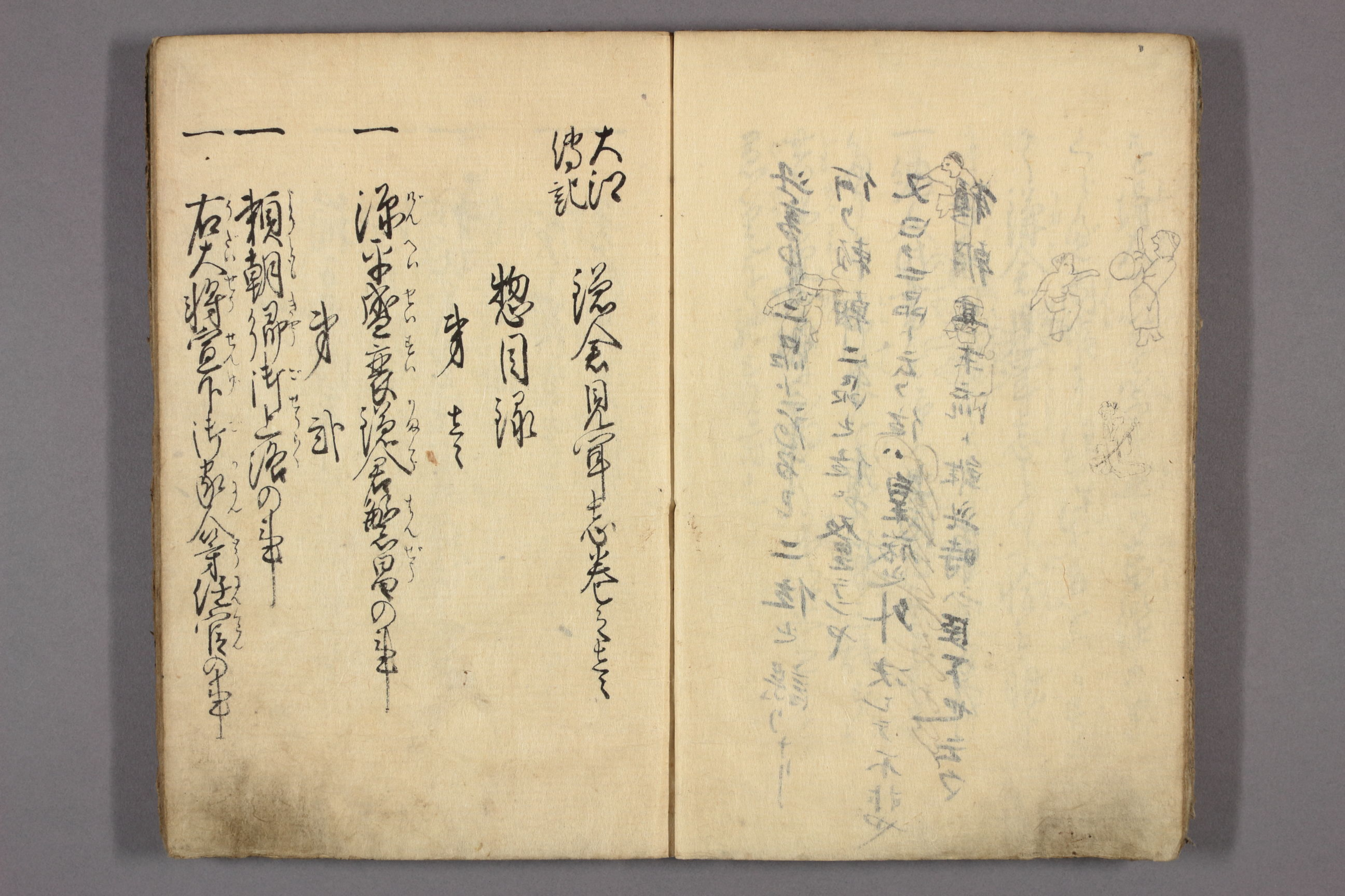
東玉子序

注書中二品ト云フ所ヲ二位ト誤リナリ

何ノ頼朝二品ヲ位ニ登ランヤ

又曰ク二品ト云フ位ハ皇族ノ外決シテ不非也

頼朝其末流ト雖当時ハ臣下也云々



大江清記

源金見軍志巻之

惣目源

光

一 源平盛衰記合戦品の事

光

一 頼朝卿浄土治の事

一 右大将宣下法都会等法官の事

一 為秋兄弟出来の事

第三

一 箱王小源太丸て貢服の事

一 北条伝実法師額を破る事

一 和田義盛伝実を抱く事

第四

一 廣元義盛を召す事

一 為秋兄弟法師を殺す事

一 法成時宗、憍慢の命を宣旨の事

第五

一 朝光家を為秋兄弟と称する事

一 二度法師を流す事

一 梶原景時、朝光を誅する事

第六

一 北条泰綱家が罷とる事

一 朝光家八幡宮の事

第七

一 島津重忠薩摩を攻撃の事

第八

一 頼朝公将軍宣下の事

一 八幡七郎為義討ち給ふ事

一 猪熊事件の事

第九

一 義経西海に逃亡の事

一 北条時政の動静を窺ふ事

一 将軍家御宮詣の事

第拾

一 二階堂行政獄囚となる事

一 京光康を射殺の事

一 猪熊事件の事

第拾壱

一 猪熊事件二度目の討伐の事

一 曽我兄弟十郎切の事

巻十九

一 曽我十郎祐成家朝乃事

一 工藤祐経家出捕る事

一 大友能直御感状賜る事

巻十三

一 時宗公討の云々云々

一 鬼王道三郎古人物語る事

巻拾四

一 実朝公害并曽我兄弟と神宮

一 梶原景時蒲殿を讒る事

巻拾五

一 蒲殿梶原景高と相論の事

一 三河守殿御人誅罰の事

一 范頼公超過文を進ずる事

巻拾六

一 尚慶太郎梶原景時と諍事

一 尚慶將軍の寵愛の遊女の事

一 尚慶右京亮生捕る事

第拾七

一 梶原景時當座と拷問する事

一 當座右京亮梶原景時と論する事

第拾八

一 梶原景時藤次郎と取沙汰事

一 梶原景時京都へ登る云の事

一 三河守殿浮言の風流流罪の事

第拾九

一 當座鬼界島流配流の事

一 源頼忠久當座と抱の事

一 藤次の娘人に流せらるる事

第二十

一 梶原景時父子と流せる事

一 神後宮の事 資清死の事

第廿三

一 安芸国沼田の事

一 義定の郎人おうと鎌倉へ捕られる事

第廿四

一 光明寺の事

一 将軍東大寺供養のる

一 南都大仏殿落慶の事

第廿三

一 京都大元帝と和睦の事

一 京都強盗沙汰のる

一 将軍東大寺へ参のる

第廿四

一 北条時政息女の事

一 稲毛三郎牧の宮へ流る事

一 重忠遠江へ流と云事

一 蓮華谷寺のことを記されたる事

一 將軍頼朝公薨去の事

惣目録

大江文庫

大江氏記

源平盛衰記巻之壹

源平盛衰記巻第壹

抑日域を武を用ゐて金
の物神武天皇八百余年と
謂ひ伝てより代々を人皇と
の逆流ひとしく武威を輝かし
ぬる事を論ず源平盛衰の

四性をもつて朝敵の追伐をなして
中ゝ厳重橋の三世を殿上の有
て改元をし源平両氏武士
りて主殺をもつて濫逆滅亡をも
付て池中の石を海中
人王五十六代清和天皇貞観六の年
る員純親王初て源乃姓をあた
り殿上を辞して武官となりて

てより四つの源氏を賜て源中将をも
軍光頼信を初て軍将の家
て伊豆国に配流
結朝臣忠勤あり
く学問人々の源氏
源家の武威自ら
嫡孫六條判官為義源家の正流
として武名をとり保元の乱

嫡子義朝の為に源氏を滅ぼし平家
氏刑死の恩賞の男清盛を忠
勅切りとて朝の田を召上げ安芸
ちゝみ住もてる板馬次郎義朝おのゝ
びゝ武士を目りゝ家朝源
義朝嫡流にて武つの棟梁なりと
いへども保元の文治元年と叙位
平朝命とて云ふ所の罪と

源氏自殺して清盛は権威倍増
目を遮て平氏栄へ源氏滅
び義朝を父子共
一流の世なりなさんと悪逆専横と
平合清盛と亡さんと平治の乱
及びしかど只の平部の朝敵の
為と為り一統は勝利をしめし滅
亡せしは清盛の威勢報恩のごとく

門大臣より勅宣を賜り給ひ清和天皇の御代
大政大臣より帰り清和男源氏の御代
或る亜相藤門の参議より左右衛
大将と兼金吾武備典厩の職の間
り東部を頒ち給ふ事六拾余州を
平氏の者とし恒威と四海を震ひ
る事を伝て源氏の一族は有て無き
がごとくなりぬ源氏頼政義
長を企て背しかども本意を遂
ずして滅亡せ源氏はてみ家よ
絶せんとする処に出家の
忠範の余党ひまなく神明の加護し
て一度平氏を捕ひしがひ
思ひ沈猟尼の物ひり給ひ
の間に流人と成て時

知る治承四年八月義兵を企て
忽ちに山木判官兼隆を亡ぼし絶
て久しき白旗を石橋山に揚げ一旦
伏木の勝ちといえども終に大庭を初め
東国の一族悉く集て雷
り大庭伊豆を亡ぼし八ヶ国をく
ちぐひ威勢を振へり大ひに驕
り終に滅ぶ

ちりんと出で金の軍勢東国に向
かいて平家の大軍を迎へ
し水鳥の羽音に驚き一戦もせ
ず逃ぬしより源氏に降る者
多し攻寄りふ間まきるのれども攻と
りてせんとて相州海べに入
多ひ武将の居間き降地のもとびとり
始て海べに詣を揃へ威を示

治承三年十月廿五日平家乃ていとく
大将軍として討手に下る義仲法住
寺殿を攻奉る平家の追手とて
ふく谷に陣を取る彼谷の勢い
うち勝て京都へ攻上り法住寺殿の
一族と西海へ追下し義仲都へ入
智り博覧乃ち法皇いとを清
とを煙へて公卿と和ら礼物を

ざりもとべ法皇逆鱗ましく
義仲を誅伐の院宣を頼朝へ
下され給へ頼朝は舎弟
有る中人吉東花頼義経を大将
として東国の武士悉く御厨志
多に京都へさし登せし義仲
一戦に利を失ひ栗津の辺にて命
を落す京都騒動ようやくしずまる

らぜ二郡乃騒動一の公と城郭と
つゐに上洛の計画と思ひ立ち
能頼義を強ひ押書一の公とも
改易中国を追ひ出し吉岡豊四
文字市間が実檀の浦の合戦を平
氏の一族悉く滅亡したる也頼朝
大功ありて法皇感の余り頼朝
を二位に叙ぜられ悪く更に
但官位辞退されける中にも九州筑紫
朝臣に九州筑紫の警衛を任ぜられ
されば軍功の賞として法皇より下
賜る所の所領までも頼朝公の心よ
叶はぬ筑紫の梶原景時を二度目筑紫
とさゝぐ讒言せしもの也頼朝公
あぶ恐ろしき筑紫なれば今の
智勇無比なる者也

みもとゞ羅をひろめ諸をとゝ笑ひの
掘をとる間ゞ[illegible]と思ひて掘
弟ゞ沸云と書ひ神経胡[illegible]と諸せん
とゝ云ふ伝坂昌俊申ゞ[illegible]ら
も昌俊郎ゞ[illegible]神経の[illegible]ゞ[illegible]命
ゞ面頓[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]
るべきとの事ゞ[illegible]ゞ[illegible]
ら次奥州ゞ下向ゞ秀衡を[illegible]

[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]
奥州ゞ沸[illegible]ゞ[illegible]
ゞ[illegible]ゞ宣べゞ秀衡[illegible]
命ゞ面ゞ[illegible]
し[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]
智勇ゞ[illegible]ゞ[illegible]
ゞ[illegible]ゞ沸[illegible]ゞ秀衡
ゞ沸春衡忠衡父の遺命ゞ[illegible]

神經胡麻と云る敬一法會ハ法云
とゝのゝ迎言也すなわち新胡麻新
一切流宣とゝのひ東法宣旨のそ
ゝ也但也奥州平泉の元ハ神經
第ゝ也爲ゝとの流宣をゝ下さる
養和元年正月新
此年ゝと將ゝ文治元年四月新
齊ゝの鎧ゝ給て神經胡麻とゝて

ひ首を取法會ゝ送る法ゝとゝ也新
胡麻ゝ聞る由新ひの心ゝ法ゝ
泉冠者忠衡を討ゝ出ゝべゝ
奥州ハ御ゝ平泉ゝとゝ
御ゝ泉ゝ方ハ討ゝ忠衡
と討ゝ法會ゝ法ゝ新ゝ
ゝきゝ行ゝ新胡麻ゝ
ゝ法て平泉奥州を御ゝ

鎌倉実朝を初めとして
文治元年七月二位尼ら大軍を
率して奥州に発向あり出羽国
御討死して出羽八郡を海東あり
国衡は日本奥州の国二つの内
を入手定まりぬ恐れ滅び
終に国衡は海内の文治
元年より日本六十六国惣追補
使を諸国に置き
を文治の政事武家の始
て天下乃武家となる源氏の始
置て中古百余年
なるを和もとりて奥羽の国
八郎御代に成地中法を府の家
名を保て軍旗を忠盛の代
子孫奥州一国を入四海一流

の新澄と称り澄金乃源ひ新
増り氏百姓のもとへまで間中
米を沙ひ米を沙ひ米を源百蔵を流
悦ひ事まもとして米ひ米
源る新始る上源者べき中源
さ中新くり四月元の米じもあり
て建久元年と称り今年中ハ市上
治の四積りまるとしかう清月元あ

りるる彼と四年蜷く源る変
秋もまるく名みもともきれしも読よ
変定七年あまぶ十月二日諫会
を行を貨と定らる大江廣元先
遣て上治り二和の四源寝流士の
後高の角を作る赤松遠右衛門尉宮源
とあり会と角と調へ清居りあ
諫会員宮忠奏とる源